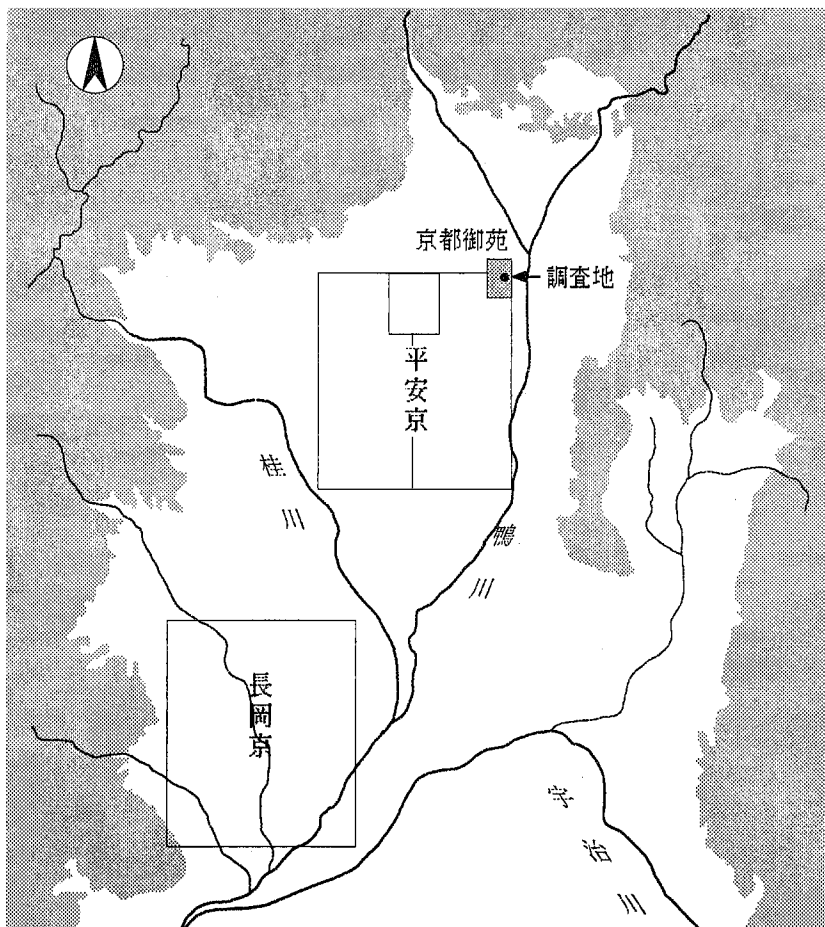


平安京左京北辺四坊

—京都御所東方公家屋敷群跡—

発掘調査現地説明会資料 3



1999年7月10日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

場 所 京都市上京区京都御苑3（饗宴場跡グラウンド跡地）
期 間 1999年4月19日 ～ 継続中
調査面積 約1,740㎡（第1調査区）
調査主体 （財）京都市埋蔵文化財研究所

調査の経過

本調査は和風迎賓施設（仮称）建設工事に伴う第3回目の発掘調査である。建設予定地内においては、1998年3月より1999年1月まで緑地帯部分において第1回の発掘調査を実施した。ここでは第1調査区において江戸時代の礎石建物を良好な状態で検出したため、現地説明会を実施している（『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料』1998年6月13日）。

ついで1998年8月より、東側のゲートポール場跡地において第2回の発掘調査を実施した。ここでは江戸時代の道路跡を良好な状態で検出している（『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料2』1998年10月24日）。

今回の調査地は、第1回調査地の南側に広がる饗宴場跡グラウンド跡の西半分である。北半分を対象に第1調査区を設定し、本年4月より調査を開始したところ、南端部で屋敷の境界を示すとみられる石垣をもつ溝、それに接して江戸時代末期の庭園遺構、さらに能舞台とみられる遺構などを検出したため、ここに現地説明会を開催することとなった。

調査地の歴史的環境

建設予定地は平安京の東北隅、左京北辺四坊の五町・六町・七町・八町に該当する（図1）。七町では藤原良房の邸宅「染殿」や清和上皇の後院「清和院」が推定されている。本調査区は、五町・六町・七町・八町の間^{おおぎまち}に位置し、南北方向の富小路と東西方向の正親町小路との交差点が検出される場所にある。

桃山時代以降、一帯には公家衆の屋敷群が形成される。江戸時代の絵図を見ると、京都御所東方の公家屋敷群は宝永5年（1708）の大火を境にそれ以前と以後で配置に大きな変化があったことがわかる。宝永大火以前の絵図（図2の左）によると、周辺は中筋通と二階町通にはさまれた東西二列の屋敷からなっており、本調査区は「志（清）水谷中将殿」と「柳原殿」に該当する。しかし宝永大火以後の絵図（図2の右）では中筋通・二階町通間^{おおぎまち}は一つの屋敷となり、本調査区は「柳原」の範囲に該当する。

京都御所東方の公家屋敷群は、その後も天明8年（1788）と嘉永7年（1854）に大火に見舞わ

れたが、屋敷の配置に大きな変化はなく幕末まで存続した。しかし、明治2年(1869)の東京遷都にともない公家衆が東京に移ると、ほとんどが撤去され荒廃した。そして、明治10年(1877)から数年かけて整備され、現在の姿となった。

検出した遺構

① 饗宴殿跡(図3・写真3)

調査区の中央から西半にかけてコンクリートの基礎と地中梁を連続して検出した。これは昭和3年(1928)に挙行された昭和御大典に際し造営された饗宴殿の痕跡で、検出したものはその北面と東面にあたる。また西端で検出した南北一列の基礎は、建物内部にめぐらされた回廊の外側柱列とみられる。基礎の間隔は、東西・南北とも約3.6mである。昭和の御大典に伴う饗宴殿は、一辺72m四方の正方形であったとされるので、さらに南方と西方に延びる。

② 江戸時代末期の庭園と溝(図4・写真1)

溝30・溝35はともに両肩に石垣をもつ溝である。調査区南端において検出した溝30は新旧の作り替えがあり、最初の溝(溝30古)は東西方向に直線的に掘られ、敷地の境界施設であったとみられる。溝30新はこれを壊して構築された溝で、西半でいったん蛇行したあと、 $Y=-21,160$ 付近で南西方向から池25に取り付いていたとみられる。溝35は北西からカギ形に折れながら南東に至る溝で、同じく $Y=-21,160$ 付近で溝30新を壊わすかたちで池25に取り付いていたとみられる。

池25は長さ約6m、幅約2.5mの池本体と小礫を敷いた部分からなる。池底にはしっくいを塗り固め、東端には円形に窪められた箇所(魚寄せ)、その東にはしっくいの壁が立ち上がる。この壁が水門の役目をなし、ここを溢れ出た水が小礫を敷き詰めた東側に流れ出ていたとみられる。小礫を敷いた中央南寄りでは、形や大きさが揃ったチャートの河原石を円形にめぐらせる。この池には州浜や景石の施設はない。しかし、斜面にはしっくい巻きで巻かれた石が据えられていた形跡がある。また南岸中央には底の抜かれた甕が1個据えられる。植栽のために据えられたのであろう。しっくい壁上面の標高は49.78mである。水位がここまで達すると導水路である溝30新・溝35内にも水が及ぶ。池25への水の流れはきわめて緩やかであったろう。

③ 能舞台(図5・写真2)

円形を呈する土壇64を中心に、その東で埋甕33、西で埋甕38、南で埋甕34・埋甕37を検出し、さらに埋甕33の東約3mで埋甕23・埋甕74・埋甕155を南北に並んで検出した。以上7個の甕は信楽産の通常の甕であるが、すべて口を傾けて据えている点で、音響効果を意識して据えられたと考え、ここに能舞台を想定した。そして甕の配置及び甕の口の向きから、土壇64を中心とする付近を「^{ほんぶたい}本舞台」、南の埋甕34・37の付近を「^{あとざ}後座」、3個の甕が南北に並ぶ付近を「^{はしがか}橋懸り」に復元した。土壇64が本舞台直下の掘込み施設となると、底にある2箇所の凹部にも甕が据えられていた可能性がある。能舞台と屋敷との関係は明確にできていない。ただし、建物礎石や建物周囲に掘られる集石遺構を舞台の東側で多く検出しているため、能舞台は池25の北側に建てられ

た屋敷の西側に張り出すかたちで設置され、屋敷とは廊下でつながる構造であったと推定した。

④ 北半部の土壙群 (図3)

現在掘下げ中である調査区の北半部には、大規模な土壙が多数掘られている。特に土壙165・188・211・235は規模が大きい。土壙165は火災後の焼土や焼瓦が大量に投棄された穴で、天明の大火(1788年)に伴う整理土壙と考えられる。一方、土壙211は日常生活に伴う廃材の廃棄土壙であり、ここからは18世紀の土師器皿が大量に投棄された状態で出土している。土壙235も17世紀後半の土師器を大量に廃棄した土壙である。

⑤ 室町時代・平安時代の遺構

室町時代後期の遺構として、柱穴・溝・土壙などがある。これらは調査区のほぼ全域に認められる。

平安時代の遺構としては、富小路と正親町小路の路面とみられる礎敷の範囲を確認している。富小路の遺構は、第1回目の調査では明確にできなかったため、その成果が注目される。正親町小路については、1997年6月に実施した試掘調査(第4調査区)で路面と南側溝を検出しており、本調査区に及んでいたことは確実である。

出土した遺物

現在までのところ、江戸時代後半から幕末期にかけてのものが出土している。種類と内容は以下のとおりである。

肥前磁器(染付・青磁染付・白磁・上絵)、肥前陶器(京焼風陶器・刷毛目椀)、京・信楽系陶器(楽焼系陶器・鉄絵・呉須・播鉢・甕)、瀬戸・美濃系陶磁器(染付・白磁・灰釉・褐釉)、丹波陶器(播鉢)、堺・明石系陶器(播鉢)、中国磁器(青花)、土師質土器(皿・蓋・焼塩壺・胞衣壺・ほうらく・風炉)、瓦(軒瓦・鬼瓦・道具瓦)、土製品(人形・玩具・ミニチュア・箱庭道具)、銭貨(寛永通宝・他)、ヨーロッパ陶器、ガラス製品(板・椀・髪飾り)、金製品(針)。

注目すべき遺物としては、池25の埋土から出土したヨーロッパ陶器(フロウンブルーチャイナ)がある。この池25からは、他にも美濃・瀬戸系の磁器をはじめ幕末期の遺物が出土している。能舞台の埋甕は、ほぼ同じ法量の信楽産の甕が使用されている。北半部の土壙群のうち、土壙48からは「安政三年」(1856)と墨書した陶器鍋が出土している。この他、18世紀後半の良好な一括遺物として、石組12から出土した土師器皿・蓋、肥前磁器、京・信楽系陶器、楽焼系陶器、人形・ミニチュア土器などがある。金針は鍼灸用とみられるもので、便甕68から出土した。

調査の成果

第1回の発掘調査においては、X=-108,380付近・X=-108,408付近・X=-108,438付近でそれぞれ屋敷の境界を示すとみられる柱列、石垣をもつ溝などを検出している。これらの間隔は約30

mであり、絵図に記された屋敷の寸法と比較するなら、 $X=-108,380$ の以北は「富小路家」、その南は「千種家」、さらにその南は「園家」の範囲であったと考えられ、第1回の調査で公開した遺構は、千種家でなく園家の屋敷とするのが妥当である。

したがって、その南に位置する本調査区は、「清水谷家」全域と「柳原家」の北半部に該当する。図2左に掲げた『寛永後万治前洛中絵図』によると、ここには「志水谷中将殿 廿間」の書き込みがある。二十間は39.4mに復元されるので、 $X=-108,477$ 付近に清水谷家と柳原家の境界が求められる。しかし、目下のところ該当する遺構は検出できていない。本調査区の南端で検出した溝30は、 $X=-108,492$ 付近にあり、園家・清水谷家の境界からは南北54mの距離にある。図2右にみるように、宝永大火以後の屋敷は清水谷家がなくなり南の柳原家が北に拡大したとみられるので、時期的にみても本調査区は宝永大火以後の柳原家の範囲にそのまま重なるとみてよい。

柳原家は日野家の庶流で、家格は名家、江戸時代には202石を有した。前期には資廉すけかど、中期には光綱みつなが武家伝奏（武家の奏請を朝廷に取り次ぐ役）となり、幕末期の光愛みつなるも公武合体派の公卿として活躍した。屋敷内に能舞台を構えた背景には、幕府側とも親密であったことが関係するのであろうか。

能舞台は円形の土壇64と埋甕7個から復元したものであるが、とくに見所けんしよである屋敷との関係は判明していない。北側に折り曲げ復元した橋懸りも、通常は舞台の斜め後方に取り付くため不自然であるが、舞台東南に池25が存在するためこうした配置をとったと推定した。池25の導水路である溝35は、能舞台の周囲をめぐるかたちで池25に至るが、これも能舞台が設置された際に改変されたのであろう。また見所の位置は遺水（溝35）と池25の位置関係から、能舞台北側であったとするのが最も自然であろう。

北半部では大規模な土壇が掘られている。いずれも火災や生活廃材処理のための穴である。礎石や集石遺構の集中する南半には、このような大規模な穴は掘られていないため、礎石・集石遺構の分布する範囲に屋敷が構えられ、その北側の空き地には生活や火災時の廃材処理穴が掘られたのであろう。ただし、これらは宝永大火以後の柳原家の配置であり、大火以前の清水谷家については、調査している遺構の下にあるため解明できていない。

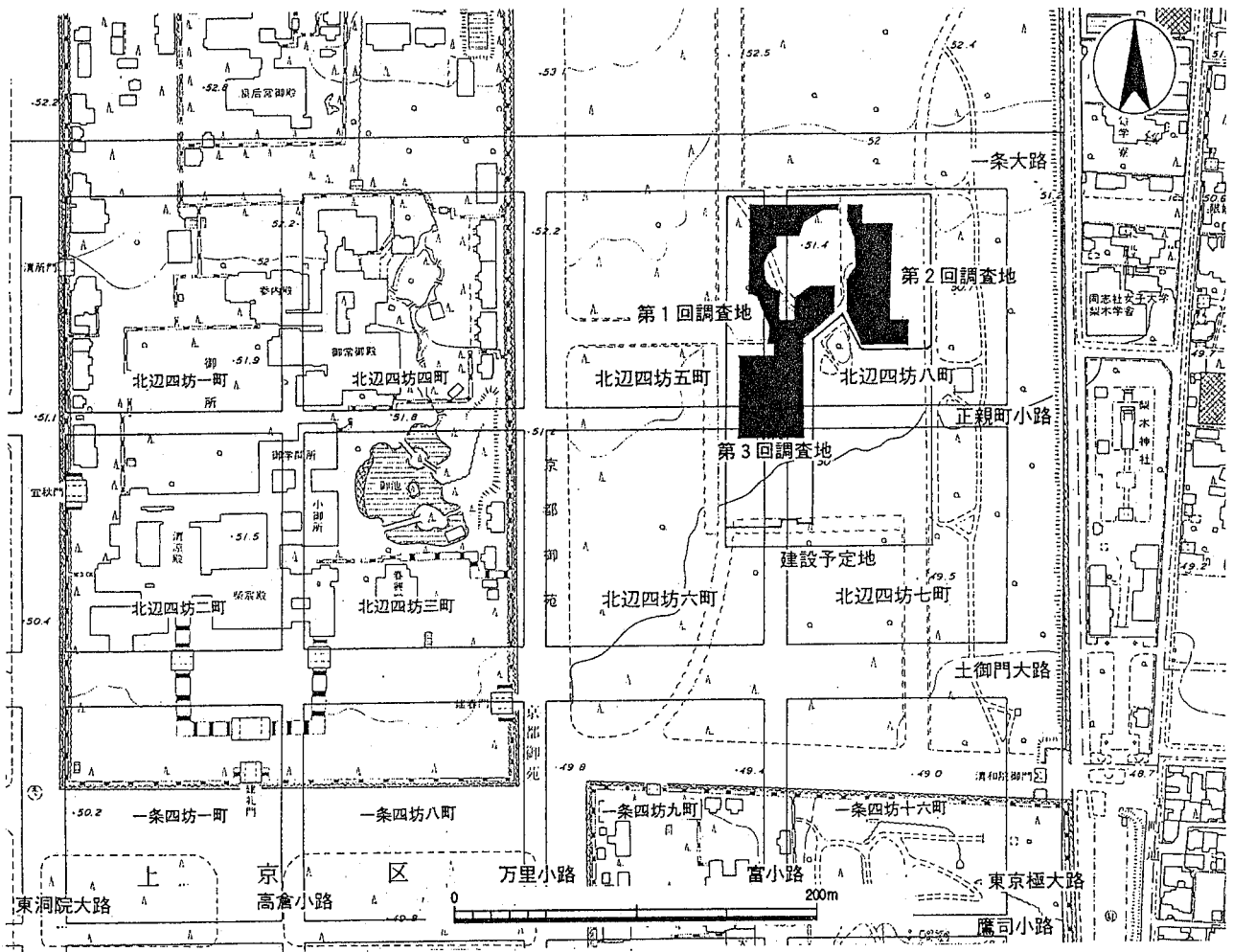
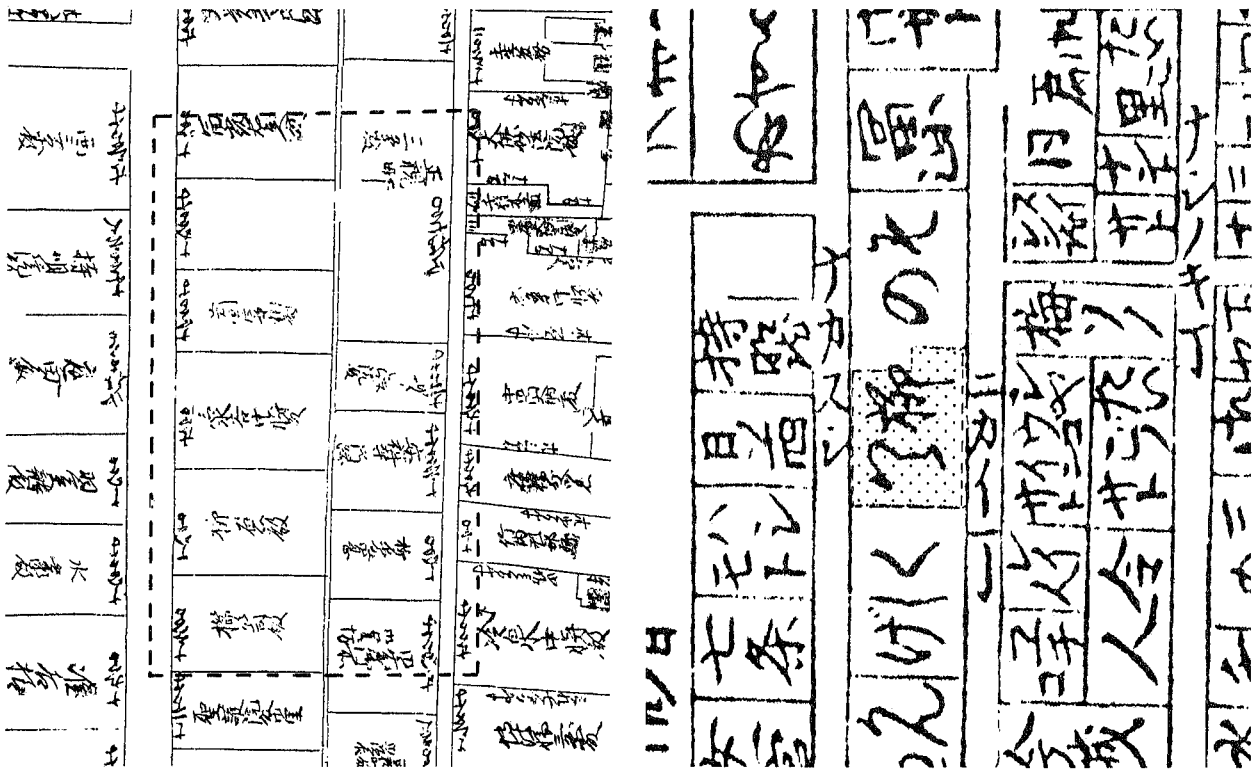


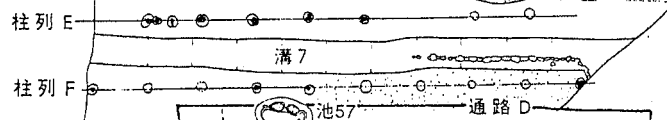
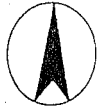
図1 平安京の条坊と調査地 (1 : 4,000)



『寛永後万治前 洛中絵図』寛永19年 (1647) 頃
点線内が建設予定地

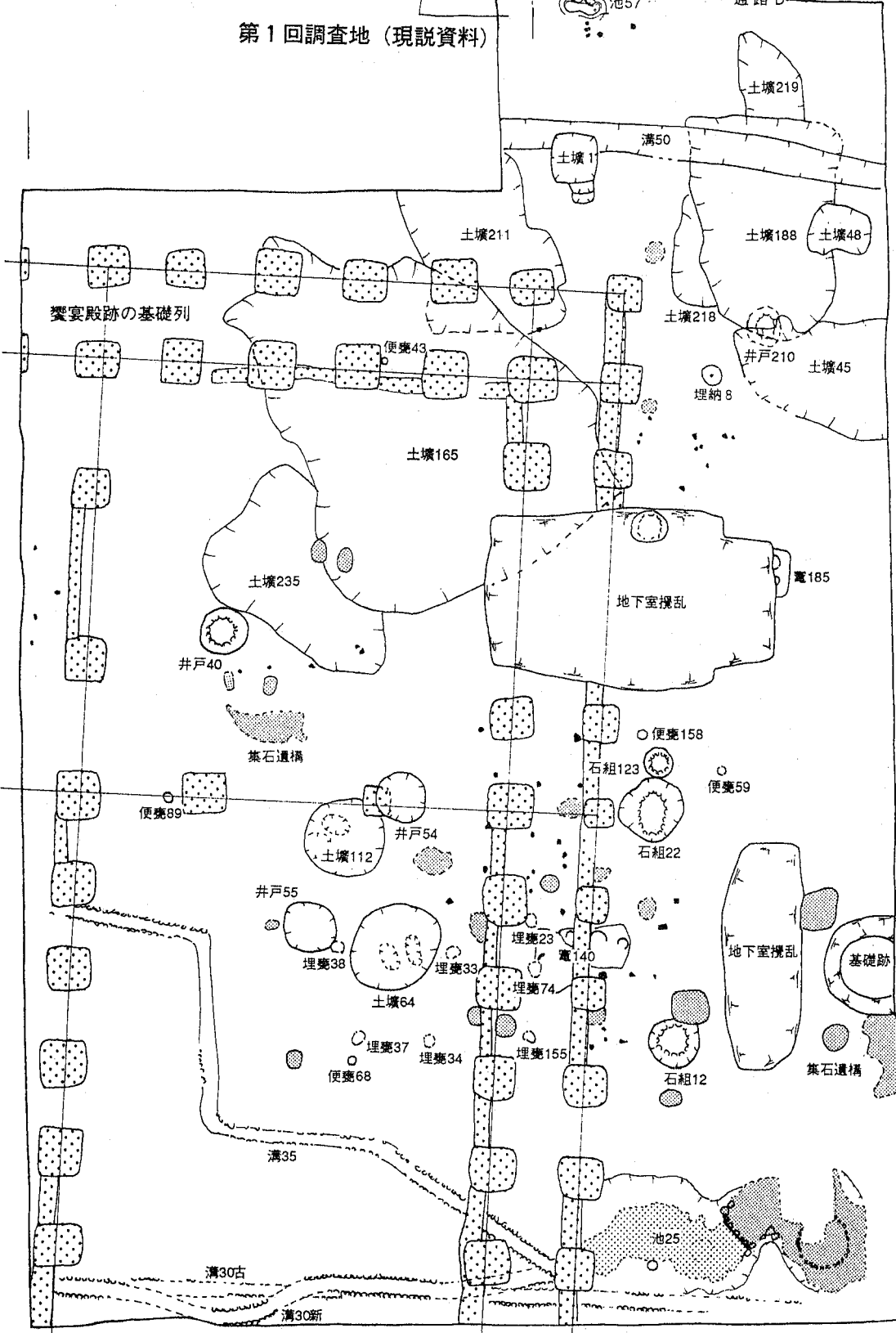
『増補再板京大絵図』寛保元年 (1741)
網が本調査区

図2 江戸時代絵図での調査地付近



第1回調査地 (現説資料)

X=-108,440



X=-108,460

X=-108,480

Y=-21,180

Y=-21,160

図3 遺構配置図 (1:250)

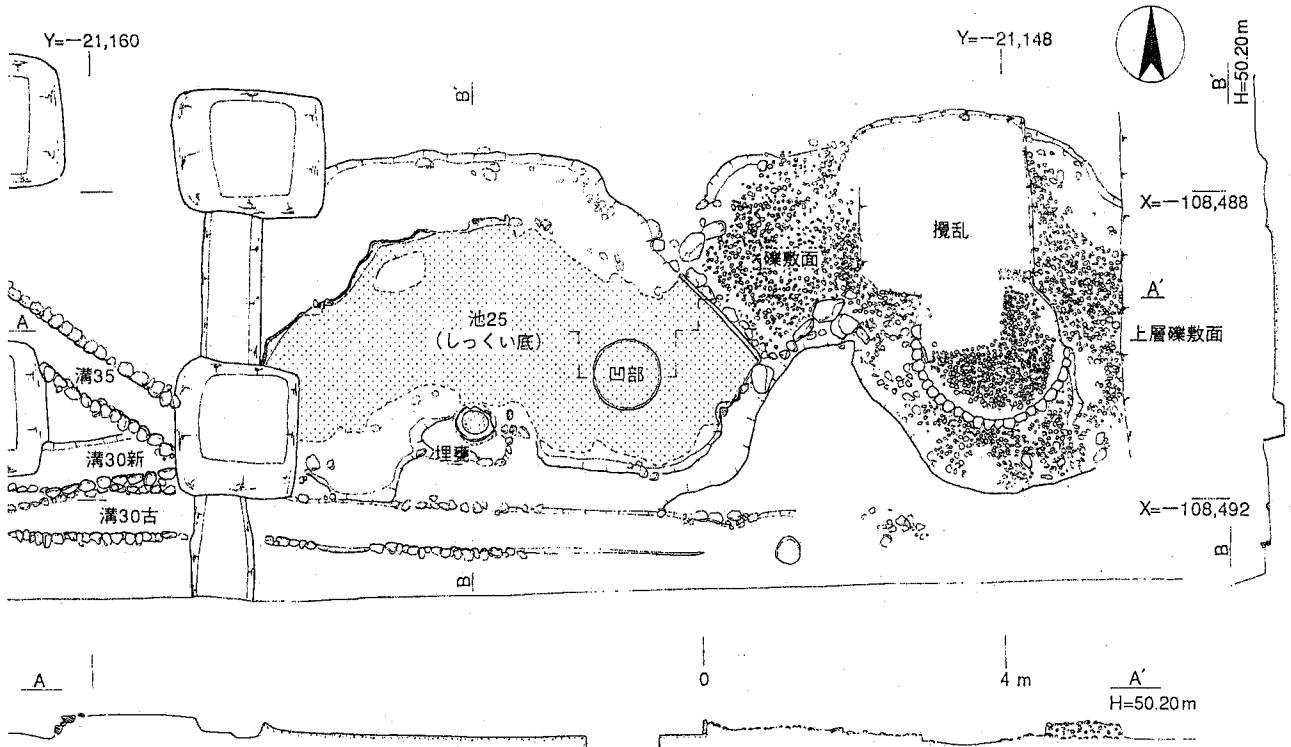


図4 池25実測図 (1:100)

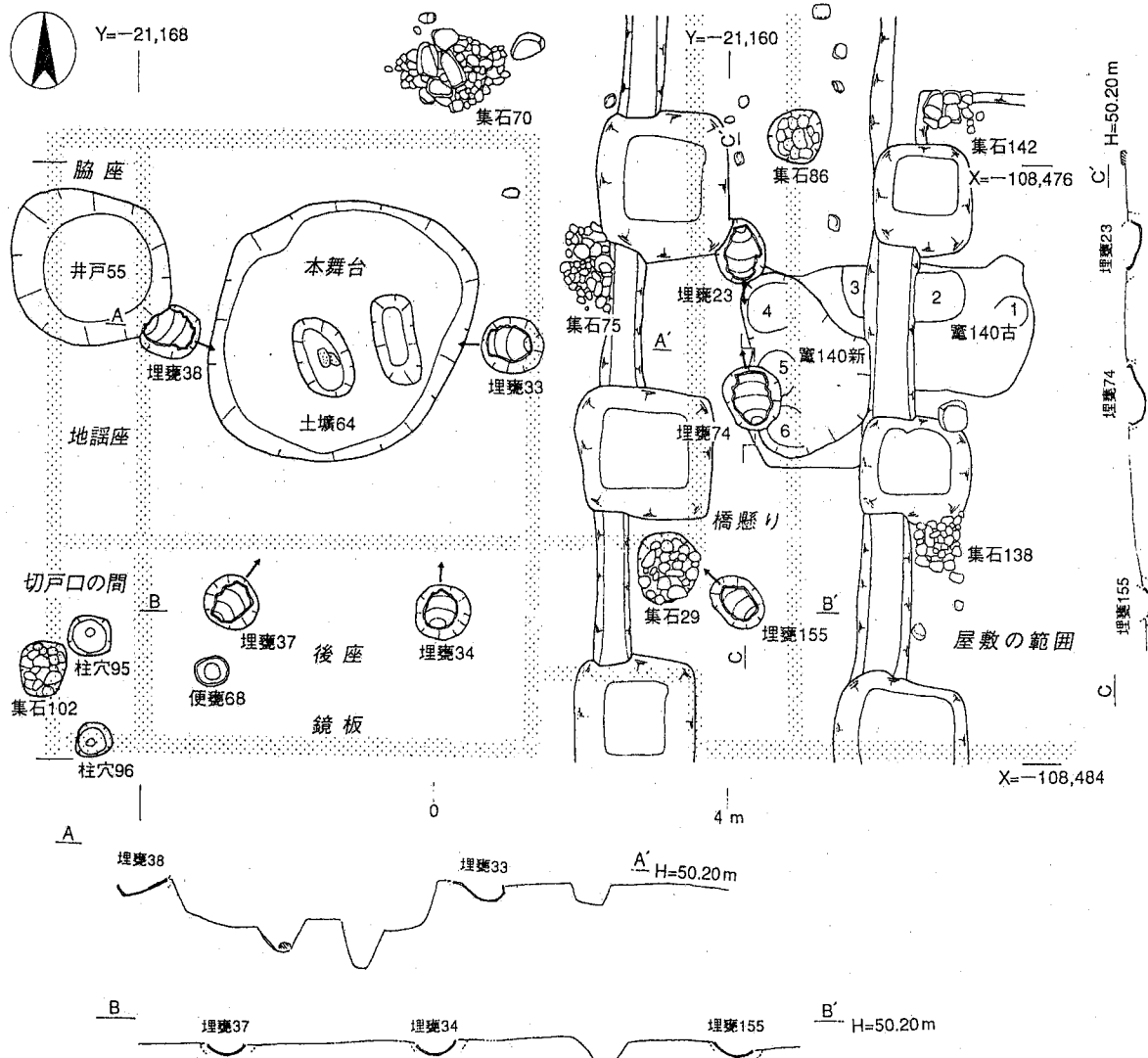


図5 能舞台実測図 (1:100)

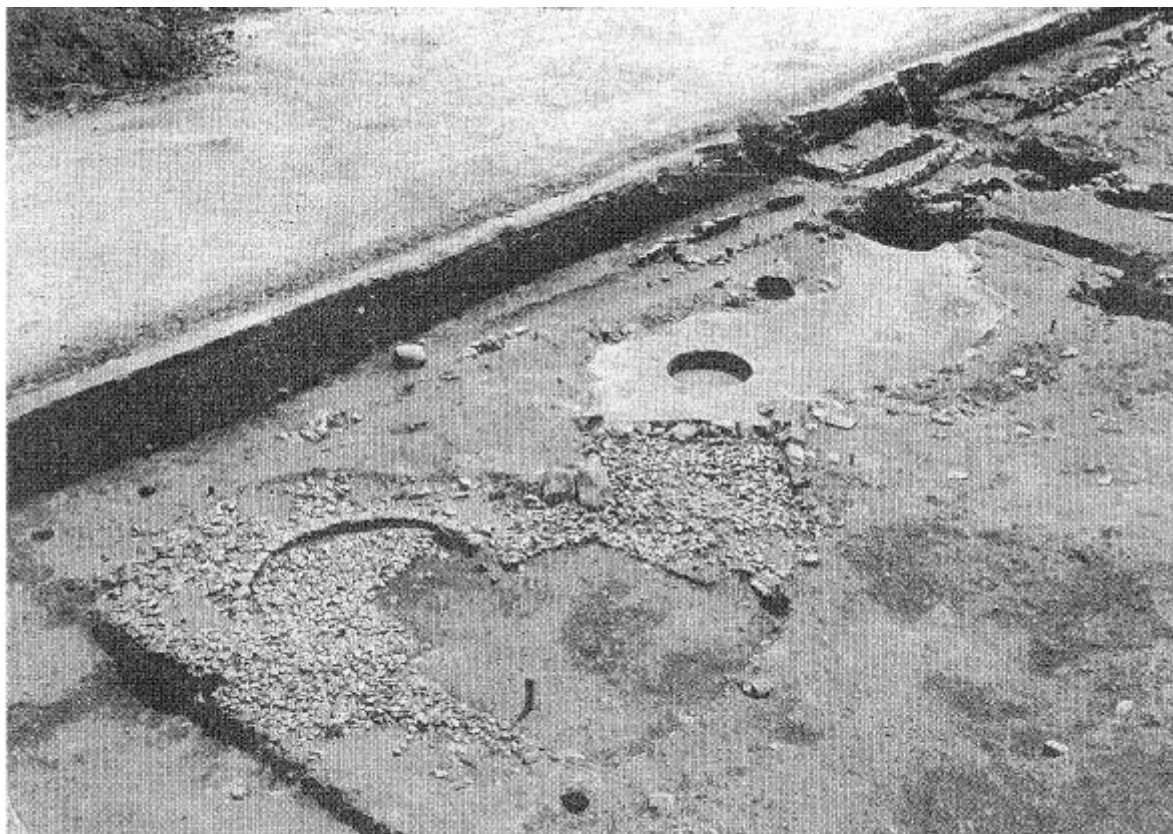


写真1 池25の全景（北東から、池本体はしっくいを塗る。
手前は小礫を敷き詰めた排水部）

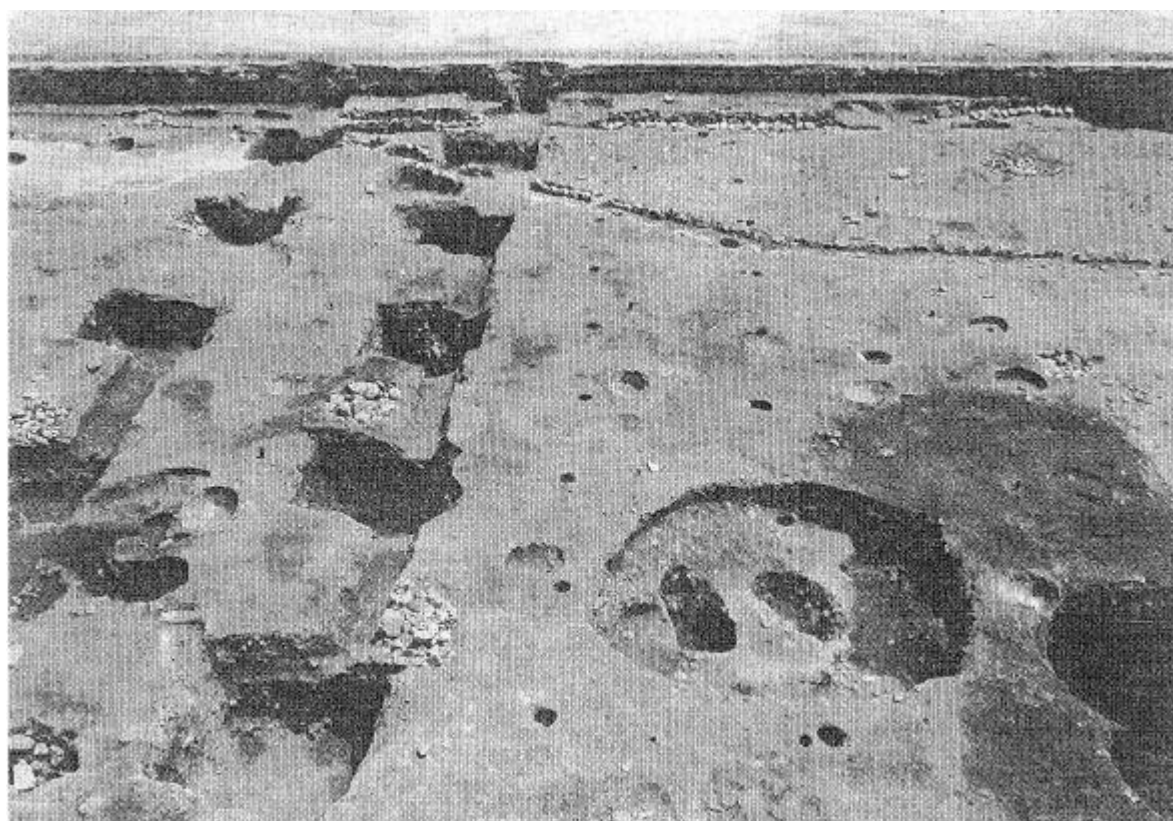


写真2 能舞台遺構の全景（北から）

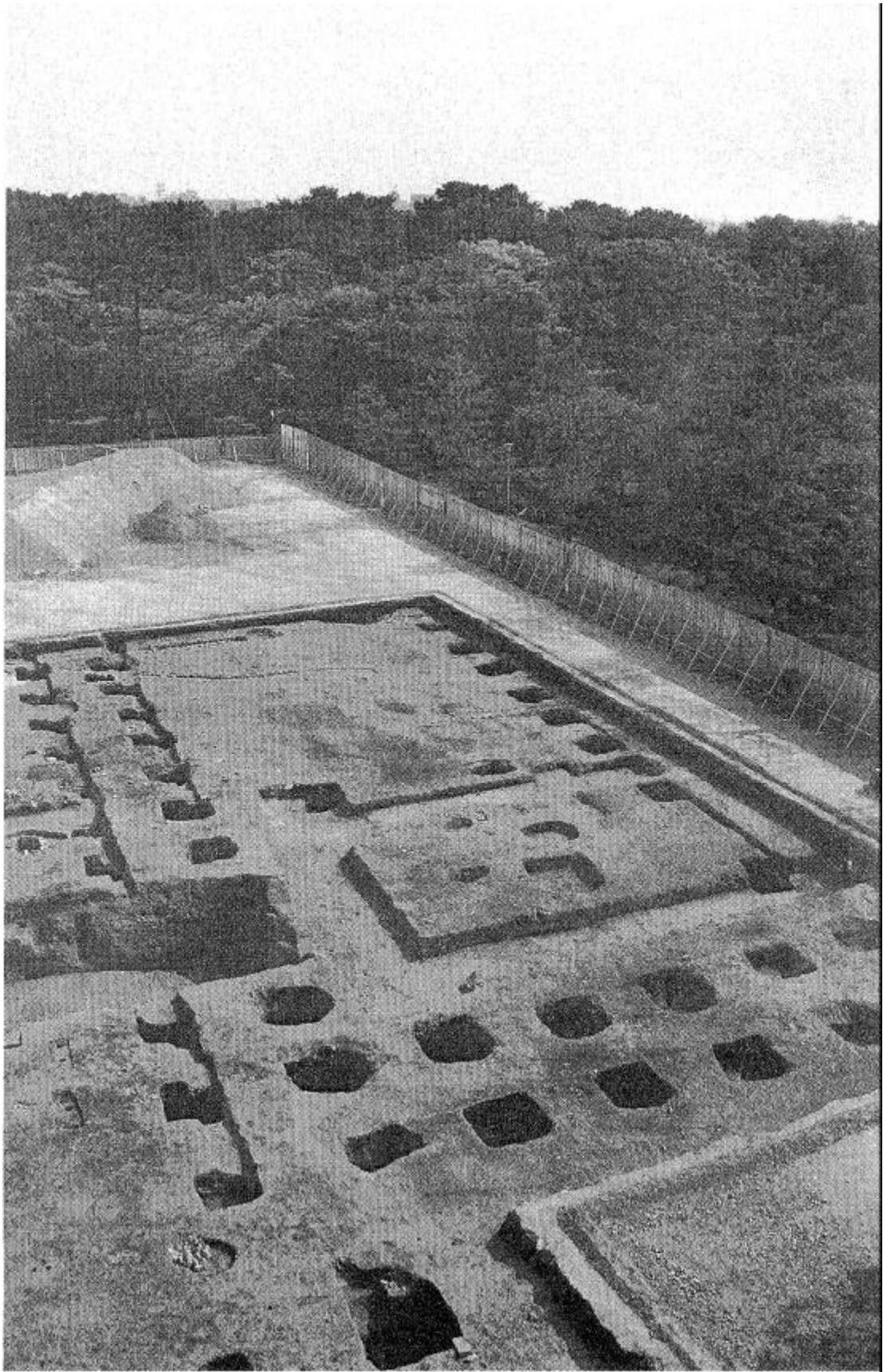


写真3 昭和御大典の饗宴殿跡（北東から）